『アルジャーノンに花束を』

弘前大学教育学部附属中学校　伴　駿斗

『アルジャーノンに花束を』は、知的障害を抱える主人公チャーリーが実験的手術により、知能を高め、普通の人と同じような生活を送るようになってからの人間関係や、苦悩を描いた物語です。

物語の主人公であるチャーリー・ゴードンは、三二歳になっても幼児並みの知能しかない知的障害を抱えていました。ある日、そんな彼のもとに、頭をよくする手術という夢のような話が舞い込みます。彼はその話に飛びつき、手術は無事成功します。そして日を重ねるごとに彼は天才へと変わっていきます。

しかし、賢くなることはいいことだけではありませんでした。賢くなったことで、ずっと友達だと思っていた周りの人が自分のことを馬鹿にし、笑っていたことに気づいたとき、人を疑い始め、人を心から信用できなくなってしまいます。私も似たような経験があり、友達だと思っていた人が裏で陰口を言っていたということがありました。私はそのとき、怒りや悲しみなどでいっぱいになり、同時に他の人も、もしかしたら陰口を言っているのかもしれないと思いました。そうした経験から、私はかなりチャーリーに同情することがありました。

「僕の知能が低かったときは、友達が大勢いた。今は一人もいない」

周囲の人の自分を見る目が変わり、みんながあまりチャーリーと関わらないようになります。それでもチャーリーはたくさん悩み、迷いながらも少しずつ前に進んでいきます。

私が特に印象に残ったのは、チャーリーが成長していく過程での苦悩や孤独感に対する描写です。彼が過去の自分を思い出し、知り、同時に理解できずに苦しむ姿や、周囲の人々の彼を見る目が変わってしまうことに苦しんでいる姿に、とても同情し、胸が痛くなりました。チャーリーは手術をする前、とても素直で、みんなが何を笑っているのかもわからず、一緒に笑っていました。私は本を読みながら、もしかしたら、

チャーリーは手術をしなければ良かったのかもしれないと何度も思いました。純粋で素直なチャーリーは、疑うことを知らず毎日楽しそうにしていたからです。

私はこの本を読んで、知能について深く考えさせられました。自分は知能を持っているのが「普通」、そして知的障害者については「可哀想」という考えをいつのまにか持っていることに気が付きました。しかし、その考えはとても恥ずかしい考えだと知りました。知的障害を持っていてもそのことを気にせず、前向きに自分の人生を歩んでいる人が、この世の中にはたくさんいるということがわかったからです。また、チャーリーが言った言葉の中に、「人間的な愛情の裏打ちのない知能や教育なんてなんの値打ちもない」というものがあります。人間として本当に大切なものは知能などではなく、他人を思いやる気持ちや愛情なのではないかと私は考えました。なぜなら、私の周りでも、頭はあまり良くないがとても幸せそうな人たちがいて、その人たちに共通しているのは、誰に対しても愛情を持って接していることだったからです。

現在の世の中は、知的障害者の方たちに対する社会的な理解や配慮が十分ではなく、知的障害を持つ人々に対する偏見や差別などが、まだいろいろなところで起こっています。そして、いつ、誰が、急に障害を持ってしまうかはわかりません。だからこそ一人でも多くの人が今一度このことを考え、理解し、差別や偏見がなくなってほしいと思いました。

私はこの作品を読んで知能についてや障害を持つ人についてとても深く考えさせられ、たくさんのことを学びました。これからは私がこの本から学んだことを生かし、人間は愛情が大事ということを多くの人に伝えていきたいです。